



鈴木カス



suzukishika

会議を終えて自席のフロアに戻ったら、鈴カステラに目がないということになっていた。共用テーブルの隅に、コンビニで百円の鈴カステラが半分強の中身を残して開いていた。先輩の男子社員が太マジックで【鈴木専用】と書きつけようとするのをなんとか制した。先輩の女子社員に「専用なのに食べてごめんね」と謝罪されたので「いえいえ」と返答するしかなかった。

鈴木として二十九年生きてきた。鈴木少年は鈴木を嫌っていた。同じく鈴木である父を憎んだ。同じく鈴木でありながら、婿を取ったために鈴木を維持した祖母を憎んだ。祖父の旧姓は佐藤だった。

鈴木は主人公になることが許されない。主人公と同じ苗字が脇役の誰かには具合がよくないからである。悪役との緊迫したやり取りの最中、「おい鈴木！」と切られた啖呵に通りがかりの人がビクッと反応しては申し訳ない。病院の待合室で「鈴木さん」と呼ばれて数名が一斉に立ち上がりかける中腰の群れの一人が主人公では体裁が悪い。物語世界の中で唯一無二の存在でいなければならない主人公に鈴木はそぐわない。少年は主人公になりたかった。結城とか鬼塚とか榊とか剣とかになりたかった。

やがて鈴木少年は成人鈴木となり、主人公はめんどくさいという事実気がついた。影が濃いから光が際立つように、ちやほやは面倒と表裏一体である。成人にはいろいろとあるのであって、表裏なく生きるのには勇気がいる。成人鈴木は鈴木を有難く思い始めた。

堂々と「鈴木です」と名乗る。嘘は一つも言っていない。真の名前をさらしても、鈴木は裸をさらさずに済む。自分を除くおびただしい数の鈴木さんという衣に包まれた成人鈴木は、本名であり匿名を名乗る。電話で名乗るたび何度も聞き返され、漢字の説明に心を砕かねばならず、そのうえ舌打ちされる珍名さんたちに同情すら覚える。鈴木は楽だ。剣じゃなくて本当によかった。

好きでもなければ嫌いでもない。それなりにそれなりに、ときどき目の前に現れて、いてもいなくてもおんなじで、人の生に波風を立てることはまずない。

二十九年間そんな程度だった鈴カステラのことを、妙に気になり始めている鈴木がいる。ただ「鈴」という、たったそれだけのことである。それだけのことであるのに、今日も鈴木は共用テーブルの隅に立っている。あんまりあたりまえすぎて、気にすることなんかなかった「鈴」のことが。牛乳が欲しいよドラえもん。